

漢詩と漢文を読む意味―六世紀の中国文学を中心に―

安藤 信廣

I 漢字・漢語・漢文

◎何故、漢詩や漢文を読むのか

日本人は、漢字・漢語・漢文について、いつの間にか知識を持っている。それは、日本語の一部として、幼い時からそれらを受容しているからである。幼稚園児でも相当な漢字を知っている場合があり、小学生でも、「入学」「学校」「授業」というような漢語を使いこなす。また、漢語（熟語）は構造として漢文でもあるため、日本人はいつの間にか漢文を読んでいる。「入学」は「学に入る」ことであり、小学生でもそのように意味を理解している。つまり小学生も漢文を読んでいるのである。

日本人は、漢字・漢語・漢文を日本語の一部として身につけている。漢字・漢語・漢文は、日本語の中に〈内在〉している。漢詩や漢文を読むことは、まずは、その事実を自覚することにつながる。

◎日本語に内在する漢語

和泉式部（九七八？―一〇三六？）に次の歌がある。
冥くきより冥くき道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

（『拾遺和歌集』哀傷）
「暗い闇からもっと暗い道にと入ってしまうでしょう。そんな私をは

るか彼方から照らしてください、山の端の月よ」との歌である。「山の端の月」は、性空上人という高僧を言うが、また真如（仏の真理）の光を月に喩えているものでもある。

歌の前半、「冥くきより冥くき道にぞ入りぬべき」は、『法華経』化城喻品けじょうゆほんの「從冥入於冥、永不聞仏名」（冥くきより冥くきに入りて、永く仏名を聞かず）に基づいているとされている。いま注目したいのは、この歌の前半が、ほとんど『法華経』の訓読そのままということである。漢文を訓読してきた伝統によって、仏典の格調をそのまま和歌の中に生かすことができた、といえる。漢語・漢文は、訓読の方法によって日本語の中に定着し、日本語の不可分の一部となっている。それを、〈日本語内存在としての漢語〉と呼びたい。

◎「みる」と「みえる」

日本語では、意識的に「みる」と、無意識に「みえる」ことを区別する。古語では、「みる」と「みゆ」の区別にあたる。漢語では、「視し」と「見けん」の区別に相当する。

「視」―（意識的に）「みる」
「見」―（無意識に）「みえる」
こうした区別は、「きく」と「きこえる」（きこゆ）にもあり、漢語では「聴ちゆう」と「聞もん」の区別に相当する。

「聴」——(意識的に)「きく」

「聞」——(無意識に)「きこえる」

漢語のこのような区別を、日本人は理解している。「視聴覚教室」(「見聞覚教室」とは言わない)という言葉や、マルコポーロの『東方見聞録』(『東方視聴録』とは言わない)という書名をごく自然に理解している。

漢詩や漢文を読む、また漢文を授業で学ぶ意味は、その「自然」な理解を対象化、意識化し、活力あるものとするためと言える。それは日本語全体を活力あるものとすることに繋がる。

II 架橋としての漢文

◎「亀の恩返し」の説話

単語や単文のレベルを越えて、日本文学の中に、外界の要素をとり入れる橋渡しとして、漢文は存在しつづけた。ここでは、説話の発想を漢文が橋渡しした例をとりあげたい。

『日本霊異記』(日本国現報善悪霊異記)三巻は、平安時代前期の仏教説話集であり、薬師寺の僧景戒の著。弘仁年間(八一〇—八二四)に成立した。内外の説話一〇数編により、主に因果応報を説いたもの。日本最古の仏教説話集とされる。その上巻に、次のような話(亀の命を贖ひ生を放ちて現報を得 亀に助けらるる 縁 第七)が見える。

禪師弘濟は、百済国の人なり。百済の乱の時に当たりて、備後国三谷郡の大領の先祖、百済を救はむが為に軍旅に遣さるる時に、誓願を發して言さく「もし平に還来らば、諸の神祇の為に伽藍を造立て多諸の寺を起らむ」とまうす。遂に災難を免

れ、すなはち禪師を請へて相共に還来り三谷寺を造る。其の禪師の伽藍と諸の寺とを造立てたる所以なり。道俗観て、共に為に敬敬ふ。

禪師尊き像を造らむが為に、京に上り財を売る。既に金と丹との等き物を買得て、難波の津に還到る。時に海の辺の人大なる亀四口を売る。禪師人に勸へて買ひて放たしむ。

すなはち人の舟を借り、童子二人を將て共に乗りて海を度る。日晩れ夜深けて舟人欲を起し、備前の骨嶋の辺に行到りて、童子等を取りて海の中に擲入る。然うして後に禪師に告げて云はく「速に海に入るべし」といふ。師教化ふといへども賊なほ許さず。茲に願を發して海の中に入る。

水腰に及ぶ時に石を以ちて脚に当つ。其の暁に見れば、亀負へり。其の備の中の浦にして、海の辺に其の亀三領きて去る。是れ放てる亀の恩を報ゆるかと疑ふ。

時に賊等六人、其の寺に金と丹とを売る。檀越まづ量るに価を越ゆ。禪師後に出でて見れば、賊等茫然しくして退進を知らず。禪師憐愍びて刑罰を加へず。仏を造り塔を嚴り、供養し已りぬ。

後に海の辺に住みて往き来る人を化ふ。春秋八十有余のとしに卒ぬ。畜生すらなほ恩を忘れず、返りて恩を報ゆ。何にいはむや、人にして恩を忘れむや。

備後国三谷郡(広島県三次市)の三谷寺(三次市の寺町廃寺跡がそれか)の縁起にまつわる説話である。三谷郡の大領(長官)の先祖が、百済滅亡を救うための派遣軍に動員されたとき(六六一年)、無事に帰国できたなら寺を建立するとの誓願を立て、無事に弘濟禪師をとまなつて帰国(六六三年)した後、三谷寺を建立した。その後、弘濟禪師は仏像を造るために都に上り、黄金など必要なものを買って、難波の

津に還ってきたとき、大きな亀四匹が売られていたので買い取って放してやった。

難波の津から船に乗って海を渡って行くと、夜更けに舟人が（黄金などを強奪しよう）と欲を起こし、備前の骨島（所在不明）のあたりで童子らを海に投げ入れ、禪師にも海に飛びこむよう迫った。禪師は無事を祈って海に入った。水が腰のあたりまできたとき、石が脚に当たった。暁に見てみると、亀が背負ってくれているのだった。中の浦（岡山県浅口郡金光町占見あたり）で禪師を降ろすと、その亀は三回頷いて去って行った。これは、放してやった亀が恩に報いてくれたのだらうと弘濟禪師は思った。「以下については略」

「亀の恩返し」の説話である。弘濟禪師は仏に祈って、海に身を投げた。すると、難波の津で救ってやった亀が、禪師を救ってくれた。それが救ってやった亀であることを説話の中で保証しているのは、「其の亀三領きて去る」という表現である。亀はただ何となく去って行ったのではなく、禪師の恩に報いたことを「三領きて」示して、それから去って行ったのである。

◎中国の「亀の恩返し」——『晋書』毛宝伝

『日本靈異記』の「亀の恩返し」の説話には、中国に、もともになる話がある。それはすでに、江戸前期の国学者契沖（けいちゆう、一六四〇—一七〇一）が指摘している。晋王朝の歴史を記した『晋書』巻八十一・毛宝（もうぼう）が指摘している。「書き下し文の表記は現代仮名遣いによる。」

宝在武昌、軍人有於市買得一白亀。長四五寸、養之漸大、放諸江中。邾城之敗、養龜人、被鎧持刀、自投於水中。如覺墮一石上。視之、乃先所養白亀、長五六尺、送至東岸、遂得免焉。

（宝の武昌（湖北省鄂城縣）に在るとき、軍人の市に一白亀

を買い得る有り。長四五寸、これを養うに漸く大にして、諸を江中に放つ。邾城（湖北省黄冈県の西北）の敗るるや、亀を養いし人、鎧を被て刀を持ち、自ら水中に投ず。一石の上に墮つと覚ゆるが如し。これを視るに、乃ち先に養う所の白亀にして、長五六尺、送りて東岸に至りて、遂に免るるを得たり。）

この「記録」が『日本靈異記』の先の説話の典拠となっていることは確かだろう。少なくとも、日本の右の説話が誕生する際の契機になっていることはまちがいない。

豫州刺史（長官）毛宝が武昌にいたとき、配下のある軍人が市場で一匹の白い亀を買った。その身の丈は四五寸（一〇センチあまり）だったが、養っているうちに次第に大きくなってきたので、これを長江に放してやった。邾城が敗れ滅んだとき、亀を養っていた軍人は、鎧をつけて刀を持ったまま（死を決意して）水中に身を投げた。すると一つの石の上に落ちたと感じたようであった。その石のようなものをじっと見てみると、なんとそれは先に養っていた白い亀で、身の丈はもう五六尺（二メートルあまり）になっていた。亀が軍人を送って長江の東岸に至ったので、軍人はついに難を逃れることができた。

『晋書』は、唐代初期、房玄齡（ぼうげんれい、五七八—六四八）らによって編纂された歴史書であるが、それ以前の複数の『晋書』に基づいている。右の文章も、相当に古い「記録」であろう。『晋書』では、足元の石のようなものを見つめた軍人の様子は、「視之、乃先所養白亀」（これを視るに、乃ち先に養う所の白亀にして）と記されている。これは『日本靈異記』の「其の暁に見れば、亀負へり」に対応している。だが、「其の亀三領きて去る」に対応する『晋書』の記述は無い。つまり、『晋書』からは、「亀が頷いてから去って行った」という肝心な部分が出てこないのである。

◎中国の「亀の恩返し」——『搜神後記』

一方、この「亀の恩返し」のエピソードは、東晋末の陶淵明（三六五—四二七）撰といわれる小説集『搜神後記』十巻に、次のように載っている。

晋咸康中、豫州刺史毛宝、戍郟城。有一軍人、於武昌市見人壳一白龜子。長四五寸、潔白可愛。便買取持帰、著甕中養之。七日漸大、近欲尺許。其人憐之、持至江辺、放江水中、視其去。

後郟城遭石季龍攻陷、毛宝棄豫州。赴江者莫不沈溺。於時所養龜人、被鎧持刀、亦同自投。既入水中、覚如墮一石上、水裁至腰。須臾、游出。中流視之、乃是先所放白龜、甲六七尺。既抵東岸、出頭視此人、徐游而去。中江猶回首、視此人而没。

（晋の咸康中、豫州刺史毛宝、郟城を戍る。一軍人有り、武昌の市に於いて人の一白龜子を売るを見る。長四五寸、潔白にして愛すべし。便ち買い取りて持ちて帰り、甕中に著けてこれを養う。七日にして漸く大にして、近んど尺許りならんとす。

其の人 これを憐み、持ちて江辺に至り、江水中に放ち、其の去るを視る。

後 郟城 石季龍の攻陥に遭い、毛宝 豫州を棄つ。江に赴く者 沈溺せざる莫し。時に亀を養う所の人、鎧を被て刀を持ち、亦 同じく自ら投ず。既に水中に入るに、一石の上に墮つるが如く覚ゆ。水 裁かに腰に至る。須臾にして、遊び出づ。中流にこれを視るに、乃ち是れ先に放つところの白龜にして、甲六七尺なり。既に東岸に抵り、頭を出して此の人を視て、徐に游ぎて去る。中江にして猶お首を回らし、此の人を視て没す。）

これによれば、事件は、晋の咸康年間（三三五—三四二）のことと

される。毛宝に仕えていた一人の軍人が、一匹の白い亀の子を買い取り、やがて長江に放してやった。その後、北朝の石季龍によって郟城が陥落すると、先の軍人は他の人々とともに長江に身を投げた。すると、石の上に落ちたように感じられ、しかもそれは、すぐに泳ぎはじめた。中流（川の中ほど）でそれを見つめると、それは以前放してやった白い亀であった。やがて東岸に至ると、（軍人を降ろし）この人をじつと見つめて、ゆつくりと立ち去って行った。川のなかほどまで行ってもなお振りかえって、この人をじつと見つめて、水の中に消えて行った。

この小説では、亀は「出頭視此人、徐游而去。中江猶回首、視此人而没」（頭を出して此の人を視て、徐に游ぎて去る。中江にして猶お首を回らし、此の人を視て没す）と、幾度も軍人を「視」てから去って行った。これが、『日本霊異記』の「其の亀三頷きて去る」に対応していると考えられる。つまり『日本霊異記』の弘濟禪師と亀のストーリーは、『晋書』によるのではなく、『搜神後記』によっているのである。

亀は何となく「見」ていたのではなく、じつと「視」ていた。『日本霊異記』ではそれが「発展」して、亀は「頷」いている。歴史書である『晋書』は、亀の視線や立ち去り方に関心を持ってはいない。しかし、『搜神後記』では、そのことが重要な、あるいは不可欠の問題だった。亀の視線や立ち去り方こそが、亀と軍人との心のつながりを物語るからである。『日本霊異記』はその立場を受け継いでいるのである。

「視」と「見」の違いを、日本人はよく知っている。それを自覚していなかったとしても、漢語や漢文を少し学べば、理解できる。また、そうした一見些細な言葉の相違から、中国の古い小説の中にあつた想

像力の特徴も理解できる。中国の古小説と日本の説話を比較することによって、かつての日本人が漢語、漢文を如何に受けとめ飛躍させたかということも分かる。漢文は、中国の文化を日本に橋渡しする、架橋するものだった。それは、右の例のような想像力のあり方で、中国から日本に伝えるものだった。

III 他者としての漢文

◎ 共感と異質さ

他方、漢文は、他者を意識させる存在としての意味をも持った。

私が研究してきたのは、中国六朝時代、魏晉南北朝時代の後半の詩や文章である。日本人にとって親しみ深い唐代文学よりも前の時代にあたる。中でも特に、庾信（五一三―五八二）という詩人について考えてきた。

庾信は唐代には一部の詩人たちから大変尊重され、特に庾信よりちよようど二百年ほどあとに生まれた杜甫（七一―七七〇）は終生庾信を尊敬していた。杜甫の「詠懷古蹟」詩其一に、次のようにある。

庾信生平最簫瑟

庾信の生平最も簫瑟

「庾信の人生は誰よりも物寂しいものであった。だがそれ故に晩年の詩賦は、長江と関中の地を揺り動かしたのだ。」こういう表現から、杜甫がどれほど高く庾信を評価していたか、ということがよくわかる。

庾信は、六朝後期の梁王朝に生まれ、宮廷で活躍する詩人として成功をおさめた。その頃流行していたのは、宮中の女性の姿態や心中を描く「宮体詩」という、なまめかしい詩だった。庾信の同僚の詩

人徐陵（五〇七―五八三）はそういう詩ばかりを集めた『玉台新詠』
あるいは『玉台新詠集』という詩集を編集した。つまり、庾信の前半生は華やかな宮廷詩人だった。しかし五四八年、「侯景の乱」という大叛乱がおきた際に、首都建康（現在の南京）を守る一部隊を任されたが立派に戦うことができずに敗退し、その後、都は陥落し、叛乱軍に占領されて、皇帝をはじめ沢山の人々が殺されるといふ事態になった。皇族の一人の元帝が叛乱を平定して、庾信は元帝に仕える。当時は南朝と北朝に分かれて争っていた時代で、且つ北朝は東魏（後に北齊）と西魏（後に北周）に分かれて争っていた時代だったので、おそらく国境交渉のために、国使として北朝の西魏に赴く（五五四年）。だがその間に西魏が梁に攻め込み、当時の梁都江陵（湖北省荊州市）は陥落して、元帝は殺されてしまう。庾信はちよようど西魏に使者として行っていたので、帰るべき国を失い、やむなく北朝の西魏に、またその禪りを受けた北周に仕えて生きることになる。二つの事件、侯景の乱と、西魏との交渉（その間に西魏が攻め込んできて梁が減ってしまった）という二つの事態に対処できなかったという事実と、その結果の重大さが庾信を一生苦しめた。

実際に庾信の心の中を示す作品として、「擬詠懷二十七首」の、其十八を紹介する。三国魏の阮籍（二一〇―二六三）の「詠懷詩」を意識した作品である。

擬詠懷

詠懷に擬う

尋思万户侯

万户侯を尋思すれば

中夜忽然愁

中夜 忽然として愁う

琴声遍屋裏

琴声 屋裏に遍く

書卷滿牀頭

書卷 牀頭に満つ

雖言夢胡蝶

胡蝶を夢みたりと言うと雖も

定自非莊周 定めて自らは莊周に非ず

残月如初月 残月は初月の如く

新秋似旧秋 新秋は旧秋に似たり

露泣連珠下 露泣きて連珠下り

螢飄碎火流 螢飄えつて碎火流る

樂天乃知命 天を樂しみて乃ち命を知る

何時能不憂 何れの時にか能く憂えざらん

漢のころ 国家のために大功をたてて万戸侯（大名）になった人のことを思うと、

夜半に、突然 私は愁いにしずむ。

琴の音は 部屋中に満ち、

書物は 寢床のまわりにまで積まれている。

蝶になった夢を見たとはいえ、

その夢から哲学をひらいた莊周では、私は決してない。

この有明の月は いつか見た三日月のように空にかかり、

この秋は まるでかつての秋のようだ。

霞が泣いて つらなつた珠がしたたり落ち、

螢がひるがえつて くだけちつた火が流れてゆく。

天の法則を樂しんでこそ 運命が分かるというが、

私はいつ憂いを持たずに生きてゆけるのか。

「連珠」（つらなつた玉）のように泣いている「露」は、横死した人々の涙であろう。戦乱で、死んだ人々の涙である。「碎火」（くだけちつた火）のように流れていく「螢」は、横死した人々の靈魂だろう。自分のせいで横死した人々の涙や鬼火がずっと心を離れない。そう考えられる。

庾信にはまた「擬連珠」という特殊な韻文の四十四首の連作があ

り、その第十六首目に、

営魂不反 営魂反らず

燐火宵飛 燐火宵に飛ぶ

というような言葉も見える。「営魂」（死者のさまよえる靈魂）が故郷に帰れず、「燐火」（鬼火）が夜の闇の中に飛ぶ、ということである。つまり庾信は、横死した人々の帰れぬ靈魂がさまよい、「燐火」となつて飛ぶ世界に生きていたわけである。

こうした苦しみに対する共感と同時に、救いようのない表現の重なりに対する一種の異質感が心中に残る。また何よりも、この苦しみが彼の社会的意識と強く結びついていることに、異質さを感じる。

国家を守り、社会を安定させ得なかつたということで、これほどまで思いつめた詩文を作るということは、日本ではあまり多くないと思われる。漢文は他者への共感を可能にする架け橋であると同時に、こうした異質な他者を認識するために開かれた窓でもある。

IV 他者の意義

◎他者をつめる

庾信は、西魏、北周に仕えて生きた。発言も極めて困難だったと考えられる。そうした状況下で、庾信は、「擬詠懷二十七首」を制作し、繰り返し自己に向かって問いを発し続けた。自己の根底を問おうとする営みを繰り返したのだった。

しかし、そうした内向的な営みだけに終始したわけではなかった。他者をつめることによって、自分を前に進める試みも行っている。もちろんここでの他者は、日本と中国という異質の文化的背景を持つ他者ということではないが、自己との本質的な異質さを持つ存在とし

ての他者である。例えば庾信は、三国時代蜀の英雄である諸葛亮（一八一―二三四）のことを、「望野」詩の中で見つめるなどしている。

「望野」は、原野を望む意。『三国志』のハイライト、五丈原に登つて諸葛亮を思った詩である。

試策千金馬 試みに策す 千金の馬

来登五丈原 来たりて登る 五丈原

有城仍旧県 城有るは仍お旧県

無樹即新村 樹無きは即ち新村

水向蘭池泊 水は蘭池の泊まりに向かい

日斜細柳園 日は細柳園に斜めなり

涸渚通沙路 涸れたる渚は沙の路に通じ

寒渠塞水門 寒き渠は水門を塞す

但得風雲賞 但だ風雲を賞するを得たり

何須人事論 何ぞ人事を論ずるを須いん

私は試みに良き馬に鞭をあて、

この五丈原へと登ってきた。

城が見えるのは 今も残る旧い県だろう、

樹の無いあたりは 新しい村なのだろう。

水は蘭池の船泊りに向かって流れて行き、

夕日は細柳園の方に傾きかけている。

涸れた水辺は 沙の道に通じていて、

冷たげな堀は水門を閉ざしたままで。

（諸葛亮は）ただ 英主（劉備）の下で風雲に乗じて活躍するこ

とができたのだから、

どうして人の世の得失を論ずる必要があるうか。

思い立って五丈原の古戦場に登ったときの作である。沈鬱で寂寥

とした、音の無い風景が広がっている。この寂しい景色の描写は、庾信の心中に去来した思いを暗示する。極言すれば諸葛亮は敗北した英雄である。天下三分の計も、最後は破綻した。では、諸葛亮の存在は無意味だったのか。諸葛亮という英傑の存在は、この寂しい景色の中に、既に影も形も無い。だが、「風雲」（臣下が名君に出会って存分に活躍する喩え）に乗じて思いのままに生きたのだから、それ自体が諸葛亮の存在の意味だった——その結果への評価は必要が無い——と思いつたのである。

この詩は、まずは諸葛亮への鎮魂の詩であろう。次いで、自己の生への苦しい慰めでもある。庾信も外交使節として恐らく最善を尽くした。しかし、後半生においては、旧国のために働くことはおろか、政治的な行為はほとんど不可能だった。自分は「風雲」に乗ずることはできなかつたが、それでも生きた。最後の二句は、それを掬い取るうとするのでもある。

行為の可能性を失った者が、一方で繰り返し自己の根底を問いなおし、他方で諸葛亮を鎮魂することを通じて、他者を文学の中に立てることによって、苦しいながらも自己の存在を評価しようとしたものと考えられる。

他者を持ち、それを見つめることを介して、自己を越えて行くことは、重要な課題である。日本語、日本文学にとって、漢文はそのような中国人の営みを示してくれるという意味での他者でもある。

◎庾信の内向性

庾信の場合は、しかし内向性が勝っていたといえる。「擬詠懐二十七首」の其二十四の前半四句を引用する。

無悶無不悶 悶え無からんか 悶えざるは無し

有待何可待 待つ有らんか 何をか待つべけんや

昏昏如坐霧 昏昏として霧に坐するが如く

漫漫疑行海 漫々として海を行くかと疑う

悶えないということがあろうか いや悶えないときは無い。

待つものがあるだろうか いや待つべきものなど何も無い。

どこまでも暗く 霧の中に座り続けるかのようにであり、

果てしもなく 海の上を進み行くかのように思われる。

救いのない心の世界がこんな風に語られている。自分で提示した

疑問を自分で否定し続けるような、また霧に閉ざされた暗黒の海の上

を小舟か筏で行くような、異様な世界である。彼はそういうイメージ

に満たされた世界から抜け出せなかった。むしろ庾信は、それらのイ

メージを忘れることを自分に許さなかった。

庾信は文学という場において、煩悶する自己をみつめることを契

機にして、人間の深い姿を探り当てることに固執した。

IV 庾信の後の世代

◎庾信の周辺から

庾信の文学の営みは、六朝の貴族主義的な文学を克服していくために避けられなかったのだと私は考えている。庾信は貴族主義の中から生まれてきた詩人であるが、それが後半生では自己の倫理的な不安定性を見つめて、新しい文学を作ろうと試みたのだろう。しかし、その営み自体が悲劇的だったことは否定できない。いつかは止揚されなくてはならない。庾信の周辺には、そうした課題に向きあった人々があった。

そういう人々の中から、一人の人物を紹介したい。北周の王族の

一人で、鮮卑族、あるいは鮮卑系匈奴族の血筋で、趙王となった宇文招（五四五？―五八〇）である。

趙王宇文招は、西魏の実力者で北周の創業者というべき宇文泰（文帝）の、第七番目の男子で、北斉を滅ぼして華北の再統一を成し遂げた武帝宇文邕の弟である。父親の宇文泰は、梁の都の江陵を攻め落とすことを命じた最高責任者であるから、庾信からみれば仇敵といえる。しかし、庾信はその仇敵につかえることになり、且つ宇文泰の幼い息子たちの教育係のような役割も、背負った。そのため、まだ幼かった宇文招は深く庾信の影響を受けた。

宇文招は、若くして国家の柱石として活躍するが、五七八年、兄の武帝が、急に病気で亡くなる。すると、外戚の隋公楊堅が実権を握って、帝位を窺うようになる。（後に権力奪取に成功して、楊堅は隋王朝を開くことになる。）そのために趙王宇文招は、楊堅の暗殺を試みるが失敗して、五八〇年の七月、楊堅によって殺された。

趙王宇文招は庾信の影響を受けて、『文集』十巻があったと史書に記録されている。しかし、その文集は亡失してしまい、作品は短詩一首を除いて全て失われた。ところが、その『文集』十巻の一部が、他でもなく日本に、八世紀の聖武天皇の宸翰『雑集』の中に、残されていた。

聖武天皇宸翰『雑集』というのは中国六朝から初唐にかけての仏教関係の文章を、聖武天皇自身が天平三（七三一）年に筆写したもので、奈良の正倉院に一四〇〇年近く伝わってきたのだった。その中に「周趙王集」と題されて、北周趙王宇文招の文章七篇、実際には一〇篇が伝えられていた。趙王は誠実な仏教徒で、仏教にかかわる文章を書いていたため、文集の一部分が、聖武天皇によって書き写されたのだった。

「周趙王集」の中で特に最長編の「道会寺碑文」には、「皇帝」が道会寺を訪れて説法をしたことを賛美していて、それが重要な問題をはらんでいる。

◎六朝文学と思想の変革

「道会寺碑文」には「銘」がついていて、冒頭でこう言う。

百非妙ひやくひを体し

万徳凝神ばんとくに凝る

全ての否定「百非」、仏教では、その無数の否定の先に、常識を超越した真理の世界を見ようとするが、その「百非」は実は、仏の真理「妙」を体現している。固定観念に対して否定を重ねる「百非」は単なる否定ではなく、その中に仏の真理「妙」が実現されているということの意味する。これは、兄の武帝による有名な仏教弾圧を「百非」になぞらえているのではないかと、思う。あらゆる否定の中に実は仏の真理が隠されている。兄による仏教弾圧、その中にも仏教の本当の真理が隠されている。少し後のところでは、こうも言う。

法身豈滅ほっしんに滅びんや

世眼時淪せがんに淪むのみ

俱迷苦海くもに迷いてこそ

熟曉良津じやくきょうを暁らん

真理そのものである仏の本当の体「法身」は滅びない。世間の眼が闇に沈んだだけなのだ。だから弾圧されて仏教は終わりだと思ったのは、それは間違いであって、世間の眼の方が間違っていたのだ。もろともに苦悩の海「苦海」に迷ってこそ、悟りの彼岸への良き渡し場を知ることができなのだ——と趙王はいう。兄武帝による廃仏の「苦海」に迷ったことこそが、かえって真理への道だというのである。

この「俱迷苦海、熟曉良津」という言葉を発したとき、趙王宇文招の心に何が浮かんだであろうか。もちろん何よりも廃仏の苛烈な体験だったに違いないが、この苦海に迷う存在として趙王の心に浮かんだものの一つは、庾信その人ではなかったか。救われることのない庾信の心の世界を、趙王宇文招は良く知っていた。何よりもこの「道会寺碑文」そのものが、庾信の語彙や表現をたくさん利用して書かれている。庾信の表現を用いながら、その先に進もうとしているように見える。宇文招は、庾信を他者として凝視してきたことによって、その先に進み得た。そこに六朝文学と思想の変革の可能性を見ることができよう。

V まとめ

◎漢文から得たもの

訓読によって中国古典が日本語の中に〈内在〉化（日本語の中に取り入れられ、日本語として用いられたこと）されたために、日本語の簡潔な表現、論理的構成員などを発展させることができた。そして、中国古典の持つ多様な特質を自由に使える自分の財産とし、従ってそれを使って日本独自の思考を展開することもできた。

文学においても、漢詩、漢文を訓読によって広範な人々が享受得たがために、日本語の表現力を高め、漢詩文の発想や構成法をとり入れることができた。

また、異質性に触れることによって他者を認識し、それによって自己認識を深め、日本文学、文化の独自性を、いわば拡大し得た。漢文は、日本人が他者と向き合う姿勢の根幹を形づくった。

漢文は、日本語の新たな次元を可能にした、新しい表現方法を可

能にした、と言える。もちろんそれは可能性であって、それを実現したのは日本人である。どのような文化的な影響も、実はそれを受けとめる側の人間の膨大な営為無しには新しい花を開くことはない。影響を受けるというのは、新しい次元を開くことである。日本人は漢文訓読によって中国古典を日本語に〈内在〉化させ、そのことによって日本語と日本文化の新しい次元を開いてきたのである。

（東京女子大学名誉教授）